

カントの空間概念について

——『純粹理性批判』超越論的感性論の考察——

近堂 秀

一 問題設定

空間とは何か。時間とは何か。カントはこの問いに対して『純粹理性批判』冒頭の超越論的感性論において、空間と時間は「感性的直観の純粹形式」である、という独特な解答を与えた。さらにその上で超越論的弁証論において、空間と時間の無限性と有限性に関する規定は純粹理性の二律背反へと陥るものである、とした。

このカントが展開した空間・時間論が批判哲学の体系的解釈においてきわめて重要な役割をはたしていることは、改めて指摘するまでもないであろう。周知のごとく、ハイデガー、マルチン、ハイムゼートラはこの空間・時間論に着目して『純

粹理性批判』の形而上学的解釈を遂行し、カント解釈史上ひとつの大きな潮流をなした⁽¹⁾。また、批判哲学の思想発展史的な観点からしても、その重要性は確認できる。批判期前の七十年論文においてすでに空間・時間の原理によって感性界と英知界の区分がなされているということを手掛かりとしながら、批判期開始を告げる思想的転回の過程が明らかにされている⁽²⁾。それでは、空間・時間の原理がどのようなかたちで批判哲学を成立させているのか。この点については、それらの超越論的観念性が指摘されるであろう⁽³⁾。空間・時間が感性的直観の純粹形式であるということは、有限な存在としての人間にとっての現象とその彼岸

にある物自体の間に限界を設けると同時に、その超越論的観念性に基づいて超越論的観念論が展開され、人間の認識様式は普遍妥当性を獲得するのである。このことは演繹論、図式論、原則論と分析論全体において検討されるべき事項である。

以上のような多様な側面をもつカントの空間・時間論を考察する前提として、本稿では特に空間概念の究明について明らかにすることを目的とする。「感性的直観の純粹形式」という空間の概念規定とその究明の過程はいかなるものであるのか、カントの叙述に即しつつ検討する。

二 空間・時間の概念規定

『純粹理性批判』における空間概念とその究明を考察するにあたって、まずわれわれはそれらが中心的に論じられている箇所を確認する。該当する部分はすなわち、超越論的感性論である。その構成は次の通りである。(なお本稿では第一版と第二版の相違に関して、基本的に第二版に従いながら、解釈上の問題となる部分について随時指摘していくこととする)。

第二版の改訂の際に超越論的感性論は八個のバ

ラグラフに整理された。第一パラグラフは序論的導入部として概念規定から始められ、ここにおいて空間と時間は感性的直観の純粹形式であると概念規定される。この概念規定について、第二く三パラグラフでは空間が、第四く六パラグラフでは時間を取り扱われて、それぞれ形而上学のおよび超越論的に究明されて結論付けられる。この究明の形而上学的と超越論的という二つの区分は、第二版でなされたものである。以下第七パラグラフは「解明」と題されたもので、時間と空間の絶対的實在性の主張について反駁が加えられている。そして第八パラグラフの感性論に対する注解は第二版では四つの注に整理されているが、そのうちの三つの注と最後のまとめである「超越論的感性論の結び」は新たに書き足されたものである。

以上の様に超越論的感性論は構成されているが、われわれが検討すべき部分はさしあたり次の三点に整理できる。第一の点は、空間と時間の概念規定である。第二の点は、形而上学的究明および超越論的究明の区分である。そして第三の点は、それぞれ究明の過程である。特に最後の点について、本稿では中心的に取り扱うものとする。

まず、空間と時間の概念規定について、感性論の第一パラグラフを確認する。第一パラグラフは諸概念の定義、すなわち証明ではなく定立的にのみ概念を示すことが中心である。個々の概念の定義の妥当性については、われわれはここでは問うことはできないであろう。それらの概念は「議論が展開することによるそれらの語の使用からのみその意味が完全に把握されうる」⁽⁴⁾のである。

第一パラグラフの諸概念の定義は次の通りである。「感性」(Sinnlichkeit)とは「われわれが諸対象によって触発される仕方を通じて、諸表象を得るという能力(受容性)」である。この感性が提供するものが「直観」(Anschauung)であり、それは「認識がそれを通じて対象と直接に連関し、すべての思考がそれを手段として目指すもの」である。この感性的直観について「心性のうちでア・プリアリに見い出される」のが、その「純粹形式」(reine Form)である。「感覚を通じてその対象と関連する」「経験的直観」の規定されていない対象、すなわち「現象」(Erscheinung)は、「この純粹形式のうちである種の関係において直観される」。

以上のことからカントは次の様に概念を整理して述べる。「感覚に属するものがそこではなにひとつとして見い出されないすべての表象を、(超越論的な意味において)純粹であると私は呼ぶ。感性的直観一般の純粹形式は心性のうちでア・プリアリに見い出されるであろうし、現象のすべての多様なものはこの純粹形式のうちである種の関係において直観される。感性のこの純粹形式はそれ自身もまた純粹直観と呼ばれるであろう」(B35)。この「感性的直観の純粹形式」(reine Form sinnlicher Anschauung)はすなわち「空間」(Raum)と「時間」(Zeit)であり、ア・プリアリな認識の原理である。そのうち「外的感官」(äußerer Sinn)は、それを介して「諸対象を私たちの外なるものとして表象して、これらの諸対象を空間において表象する」(B37)。そして「内的感官」(innerer Sinn)は、「心性がそれを介してそれ自身を、あるいはその内的状態を直観する」(ibid.)ものであり、「内的な諸規定に属するすべてのものは、時間の諸関係において表象される」(ibid.)。

それでは、感性的直観の純粹形式として、つま

りわれわれの感性の形式として、同時に現象の形式として、かつ純粹直観として、空間と時間は妥当するのであろうか。そこで、カントは空間と時間の概念について「究明」(Erörterung)を行なうのである。「究明」とはすなわち「ある概念に属するものの判明な(たとえ周囲でないにせよ)表象」(B38)であるが、それは「その概念をア・プリオリに与えられたものとして叙述するものを、究明が含んでいるとき」(ibid.)は「形而上学的究明」(metaphysische Erörterung)であり、「他のア・プリオリな諸総合的認識の可能性がそこから洞察されうる原理としての概念の説明」(B40)のときは「超越論的究明」(transzendente Erörterung)である。以上二つに区分される「究明」は、「演繹」(Deduktion)との対比において一層その性格を際立たせることができる⁽⁵⁾。

三 空間概念の究明過程の検討

(一) 形而上学的究明の第一、第二の議論

形而上学的究明は四つの議論から構成されている。まずア・プリオリテーゼについての究明であるとされる第一の議論および第二の議論から検討す

る。

「(一)空間は外的諸経験から抽象された経験的概念ではない。なぜなら、ある種の諸感覚が私の外にある何ものかと(いいかえれば、私がある場所とは別の空間の場所にある何ものかと)関連づけられうるためには、同様に、私がそれらの諸感覚を相互に外的でかつ並び合っているものとして、したがって単に異なっているのではなく異なった場所にあるものとして表象しうるためには、空間の表象が既に根底になければならないからである。それゆえに空間の表象は外的現象の諸関係から経験を通じて借り受けられたものではなく、この外的経験はそれ自身前述の空間という表象によつてのみはじめて可能である」(B38)。

「(二)空間はすべての外的直観の根底にあるア・プリオリな必然的表象である。人は、いかなる空間も存在しないということについて、決して表象をなすことはできない、たとえ空間のうちになくなる対象も見いだされないということをよく考えうるにしてもである。それゆえ空間は、諸現象の可能性の条件と見なされるものであって、諸現象に依存する規定と見なされるものではなく、そし

て必然的に外的な諸現象の根底にあるア・プリオリな表象である」(B38f.)。

第一、第二の議論は三つの文からなるが、その論理的関係を文章構造から確認するならば、第一文がこの議論の論題、第二文がその論拠、そして第三文が結論あるいは敷衍と判断できる。よって、それぞれの論題「空間は外的諸経験から抽象された経験的概念ではない」および「空間はすべての外的直観の根底にあるア・プリオリな必然的な表象である」から、これらの議論が確かにア・プリオリテートに関するものであるということは理解できるであろう⁽⁶⁾。

感性論についての代表的な解釈としては、ファイヒンガーの註釈書のものが挙げられる。ファイヒンガーの説は次の通りである⁽⁷⁾。第一、第二の議論が究明するのは、「第一の定理」すなわち「空間は経験的ではなく、ア・プリオリな表象である」という命題である。第一の議論はその「間接的証明」であり、「すべての外的な知覚の前に空間表象が先行していること」⁽⁸⁾がその論拠となる。第二の議論はその「直接的証明」であり、空間が「離れて思考することはできない性格」(Nicht-

Hinweg-Denkbarkeit)⁽⁹⁾のものであるという空間表象の必然性を論拠とする。そしてこのことはさらに、「表象する主観に対する絶対的必然性」を示し、加えて「表象される客観に対して相対的必然性」が結論として帰結する。

この概ね妥当と思われるファイヒンガーの説に加えて、マルチンの興味深い解釈⁽¹⁰⁾を合わせて考察するならば、この第一、第二の議論におけるカントの究明過程はほぼ明らかなるものとなるであろう。マルチンもまた第一、第二の議論は空間（および時間）のア・プリオリテートについてものであるとしているが、さらにそれらが空間の存在論的規定の根拠づけのためには重要であるということを描いている。マルチンは、第一の議論と『パイドン』における同等性の概念に関するプラトンの議論と類似していることから、それをプラトンの議論と名付ける。そしてこのプラトンの議論は、「相互並存の概念をすでに持っている場合にだけ、二つの物を相互に並存するものとして認識しうるのであり、この相互並存の概念はすでに根底に存していなければならない」⁽¹¹⁾ということを証明根拠として、空間のア・プリオリテートを証明する、

と解釈する。第二の議論はこれに対してアリストテレスの『自然学』に同様の議論があるゆえにアリストテレス的議論であり、「少なくとも思考的実験においては、空間は物なしにも存在しうるが、物は空間なしには存在しえない」ゆえに、「空間が空間的な物に先行するということは完全に証明されている」と解釈する⁽¹²⁾。そして、形而上学的究明の中でも特に批判が集中する部分でもある、第二文の認容文中で言及される空虚な空間については、「空間から物体を取り去るという事実の実験から、ひとつの思考的実験をやっているだけのことである」⁽¹³⁾としている。

以上が空間概念の形而上学的究明の第一の議論と第二の議論である。その究明すべき内容と究明の論証形態を正確に把握するならば、ここでカントは空間のアプリオリテートについて明らかにすることには成功しているといえるのではないか⁽¹⁴⁾。

(二) 形而上学的究明の第三、第四の議論

続いて、直観性についての究明であるとされる、第二版の第三の議論および第四の議論について検討する。これらの議論は第一版においてはそれぞれ

れ第四、第五の議論に該当する。第四の議論は第一版、第二版ともほぼ同様であるが、第五の議論については大幅に書き換えられているので、注意しなければならぬ。

「(三) 空間は、諸物一般の諸関係についてのいかなる比量的な、あるいはいわゆる一般的概念でもなく、純粹直観である。なぜなら、第一に人は唯一の空間を表象することができにすぎず、そして多くの諸空間について述べるときにはそれらを単に全く同一の唯一の空間の諸部分と解しているからである。これらの諸部分もまた、唯一のすべてを包括する空間の前に、いわばその要素（そこからこの空間の合成が可能であるような）として先行するのではなく、ただこの空間のうちで思考されるにすぎない。空間は本質的に唯一である、空間における多様なものは、したがって諸空間一般についての一般的概念もまた、制限に全く基づいている。このことから生ずる結論は、空間に関して、ア・プリオリな直観（経験的ではない直観）が空間についてのすべての概念の根底にあるということである。そこで、すべての幾何学的原則も、例えば三角形においては二辺の和は他の一辺より

も大きいという原則も、決して線と三角形とについての一般的概念から導出されるのではなく、直観からしかもア・プリオリに必然的な確実性をもって導出されるのである」(B39)。

「(四)空間は無限の与えられた大きさとして表象される。さて、人はなるほどそれぞれの概念を表象として思考しなければならず、この表象は無限に多数の様々な可能的な諸表象の中に(それらの共通の徴表として)含まれていて、したがってそれらをそれ自身のもとに含む、しかしいかなる概念も、あたかもそれが無限に多数の諸表象をそれ自身のうちに含むかのような、そのような概念として思考されることはできない。それにも関わらず空間はそうに思考される(なぜなら空間のすべての諸部分は無限において同時に存在するからである)。それゆえ空間についての根源的な表象はア・プリオリな直観であり、そして概念ではない」(B39f.)。

書き換えられた第一版の第五の議論は次の通りである。

「(五)空間は無限の与えられた大きさとして表象される。空間についての一般的な概念(それは

フィート尺においても一エレにおいても共通である)は大きさに関しては何も規定できない。直観の進行において無制限性がなかったとしたら、諸関係についてのいかなる概念もその関係の無限性の原理をそれ自身のもとにたずさえることはないだろう」(A25)。

第二版を中心に検討していく。第一、第二の議論に比べて、論理的関係が文章構造から判定したい部分もある。まず、第三の議論の第五文と第四の議論の第四文に注目するならば、「ここから(以下が)帰結する」(*hieraus folgt*)、「それゆえ」(*also*)という語からして、それらの文が議論の結論となっていることが理解できる。そうすると、第三の議論は第一文が論題、第二、第四文が論拠として論理的関係が決定される。文中の接続詞などからしても妥当であろう。また、第三の議論と比較して内容的に判断するならば、第四の議論は論題が省略されていて第一、第三文が論拠となっている、と考えられる。論拠の部分はさらに検討が必要であるが、それぞれの論題と結論より、第三の議論と第四の議論が空間の直観性についての究明であることにについては問題はないであ

る。また、これらの議論の中心となる「空間は概念ではなく、純粹直観である」という命題は、「概念」と「直観」の論理的区分を前提としている。すなわち、直観とはその内に多様なものを持つものであり、概念とはそのもとで多様なものが統一されるものであるということである⁽¹⁵⁾。

やはりファイヒンガーの説から検討しよう。

ファイヒンガーは次の様にそれぞれの議論を整理している⁽¹⁶⁾。第三、第四の議論では、「第二の定理」すなわち「空間表象は根源的に概念ではなく、直観である」という命題が究明される。第三の議論は「直接的証明」で、「個々の諸空間は概念がそのもとに持つような一部ではなく、直観がそのうちに持ちうるような部分である」⁽¹⁷⁾ということが示す「空間表象の唯一性 (Einzigkeit)」と、「個々の諸空間はそれから概念が構成されるような徴表のように独立の先行した構成要素ではなく、まずひとつの空間表象から切り取りだされた独立していないひとまとまりの部分である」⁽¹⁸⁾ということが示す「空間表象の一樣性 (Einheitlichkeit)」を論拠としている。第四の議論は「間接的証明」で、「空間の部分の無数性 (Unzahl

barkeit)」が示す「空間表象の無限性 (Unendlichkeit)」を論拠としている。

第三の議論の論拠については、ペイトンが次の様な説明を与えている。「(一)多くの異なった空間の共通な徴表はそれらが必然的に制限されているということである、(二)したがって、われわれの空間性の概念は必然的に制限されたものとしての諸空間のわれわれの直接的な直観に由来する」。そして「必然的に制限されたものとしての諸空間の直観は、全てを包括する空間としての純粹直観を前提としている」⁽¹⁹⁾。このペイトンの解釈は、第三の議論の第二文と第三文の間、あるいは第四文の前半と後半にカント自身が特に明示していない論理的関係をもうけるものであるが、それによって空間の唯一性と一樣性の根拠が示されることになる。

また、ファイヒンガーも指摘するように、第四の議論の論拠は無数の部分に分割が可能であることを根拠とした空間の「無限性」(Unendlichkeit)であるが、これは空間の唯一性と一樣性の根拠となる諸空間の複数性という第三の議論の内容を前提としていると考えられる。一方これに対して第

一版の第五の議論は、「直観の進行」において「無制限性」(Grenzenlosigkeit)があるという異なる根拠を用いて空間の無限性を示すものとなっている⁽²⁰⁾。この書き換えによって、第三、第四の議論の論拠である空間の「唯一性」「一様性」「無限性」は、われわれが通常行なっている空間の分割ということのみから帰結されるようになる。

以上が形而上学的究明の第三の議論と第四の議論である。これらの議論においても、カントが妥当な根拠をもって究明を遂行していることが確認できるであろう⁽²¹⁾。それでは、われわれが空間を純粹直観としてすでに持っているということとは、どのような事態なのであろうか。

(四) 超越論的究明

超越論的究明は第二版において新たに区分された部分である。第一版では同内容の議論が第三の議論として上述の四つの議論と並列されており、形而上学的と超越論的とに区分されていない。

さて、そのアプリアリテートと直観性について形而上学的に究明された空間概念は、さらに超越論的に究明される。「他のア・プリアリな諸総合的

認識の可能性がそこから洞察されうる原理としての概念の説明」である超越論的究明は、「(一) 現実にそうした諸認識はその与えられた概念から由来するということ、(二) これらの諸認識は概念の与えられた説明様式を前提してのみ可能であるということ」(ibid.)、という二つの過程によって遂行される。まず第一の過程は、ア・プリアリな総合的認識としての幾何学によって示される。すなわち、われわれが現実に行なっている「幾何学は、空間の諸固有性を、総合的にしかもア・プリアリに規定する学である」(ibid.)。そして第二の過程、つまり幾何学が空間について与えられた説明様式を前提してのみ可能であるということは、次の様に説明される。幾何学が可能であるためには、「空間は根源的に直観でなければならぬ。なぜなら、単なる概念からはその概念を超えて出ていくいかなる命題も引き出されないが、しかしこのことは幾何学においては行なわれるからである」(BAF)。そして、「この直観は、経験的ではなく純粹直観でなければならない。なぜなら、幾何学的な諸命題は総じて必然的であり、つまりそれらの諸命題の必然性の意識と結び付いているからで

ある」(B41)。「それゆえ、われわれの説明だけがア・プリオリな総合的認識としての幾何学の可能性を明白にせしめる」(ibid.)。以上が超越論的究明である。

この究明の中核となるのは、幾何学の必然性である。つまり、カントは幾何学の必然性という事実に基づいて、空間のア・プリオリテートと直観性を推論しているのである⁽²²⁾。カントにおける数学の位置付けについてもまた問題となっているので⁽²³⁾、幾何学の必然性については機会を改めて論ぜられねばならない。ただ、ここでわれわれが留意すべき点は、カントが究明を遂行してきた空間とは幾何学によって必然的に規定されているものと同質であるということである。そしてこのことは同時に、純粹直観としての空間はア・プリオリな総合的認識としての幾何学の原理となるということも意味する。以上の様な究明の成果を受けて、カントはいよいよ経験一般の可能性の条件の探究へと移行していくのである。

四 結論

われわれは第二章でカントが空間概念を究明す

る過程を検討した。カントが超越論的感性論で呈示した空間概念とはすなわち、感性的直観の純粹形式としての空間であり、それはア・プリオリな認識の原理でありうるものであった。この概念規定に基づき、形而上学的究明の四つの議論によって、空間のア・プリオリテートと直観性が明らかにされた。さらに超越論的究明において、幾何学の必然性から純粹直観としての空間が説明された。以上の様な過程を経てカントが空間概念を究明したことについて、何がそこに認められるのであるうか。カントは空間とは何かという問いを直接解決することへと向わずに、あくまでわれわれの感性的直観がその純粹形式として必然的に空間性を持つことを、必要最小限の論拠をもって究明した。形而上学のおよび超越論的究明におけるカントの議論はきわめて簡潔に整理されており、われわれが無前提に持っている空間に対する様々な概念のうち、論拠足るに十分なものを最小限の範囲で規定して議論を組み立てているのである。特に第一版の第五の議論から第二版の第四の議論への書き換えは、このことを顕著に表している。空間に対する問いについて明晰に探求するカントのこのよ

うな姿勢は、かくして空間は感性的直観の純粹形式であるという結論、すなわち空間の超越論的觀念性へと繋がる重要なテーゼを導出した。このカントが示した結論がわれわれにとつていかなる意味を持っているのか、カントの思索の跡をさらに辿っていく必要があるだろう。

註

(1) H・ハイムゼートはデカルト以降の近代の哲学者たちの空間をめぐる問題を検討し、次のように帰結している。「このようにして、心的精神的な実在者の総体としての理性的存在者たちの神秘的体系 (corpus mysticum) は、空間原理の束縛をことごとく越えた、独自で本来的な《世界》にまで、カントによつて高められたのである。われわれが実践理性を通してその精髓に触れることができ、また確信してもいる物自体の国に比べれば、あらゆる空間性は、感性的に制限された人間の主観性に相対的な外的現象的な現実性を意味するにすぎないのである」(H. Heimsoeth, *Der Kampf um den Raum in der Metaphysik der*

Neuzeit, 1971, 「近代形而上学における空間をめぐる闘争」、『カント哲学の形成と形而上学的基础』須田朗・宮武昭訳、所収、未来社、七十六頁)。なお、ハイムゼートの体系的形而上学的解釈については、以下の論文を参照 (Heimsoeth, *Metaphysische Motive in der Ausbildung des kritischen Idealismus*, 「批判的觀念論の形成における形而上学的諸動機」, 前掲訳書所収)。また、同様の観点からの『純粹理性批判』解釈については、G・マルチンの説を参照 (G. Martin, *Immanuel Kant. Ontologie und Wissenschaftstheorie*, 1969, 『カント—存在論および科学論』門脇卓爾訳)。なお、マルチンは次のように指摘している。『純粹理性批判』には二つの大きな河流、すなわち科学理論および存在論という河流が流れこんでいるということは、我々を導いてゆく立脚点である。空間および時間に関するカントの学説は、このことをとくに明らかにしている」(Martin, a. a. O., S. 18f., 前掲訳書、二十頁)。

(2) 『純粹理性批判』の成立過程については、濱

田義文名譽教授が次の論文において詳しく論じている。『純粹理性批判』への道』（『カント哲学の諸相』、法政大学出版局、一九九四年、所収）。

- (3) 量義治氏は、その著『カントと形而上学の検証』において、「形而上学の検証」の書として『純粹理性批判』解釈を行なっている。量氏によれば、カントは「形而上学の検証」のために「超越論的觀念論」を証明しようとしたのであるが、感性論における空間・時間の主観性の証明の失敗ゆえにその觀念性については否定されるべきものである、とされている。量氏のラディカルな結論は充分な吟味を要するものである。（量義治『カントと形而上学の検証』、法政大学出版局、一九八四年、参照）。
- (4) H.J. Paton, *Kant's Metaphysic of Experience*, I, pp. 93f.

- (5) この「究明」と「演繹」について、中島義道氏は前批判期から遡って比較検討して次のように結論付けている。『純粹理性批判』における時間概念の「究明」を、あらためてカテゴリーの「演繹」との比較において見直すべ

両者の区別を通じて、カントのめざす「究明」独自の構造がよく見えてくる。すなわち、「究明」とは、カテゴリーの場合のように、まず判断表という「他のところから」諸徴表を導き、次にそれらがいかに現象に適用されるかを問うことではなく、現象のただなから時間概念の諸徴表を直接読み取ることである」（中島義道「超越論的時間論―その予備的考察」『カント読本』所収、法政大学出版局、一九八九年、五五頁以下）。Vgl. H. Vahinger, *Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft*, Bd. II, S. 151f.

- (6) 第一の議論について、ファイヒンガーは「カントにとって『経験的ではない』ということと『ア・プリオリな』ということは同一である」ゆえにむしろアプリオリテートについての積極的な主張を見出し、この議論をアプリオリテートについての消極的な論証とするコーエンの説に反駁している。また、第二の議論について、ファイヒンガーは *Der Raum ist eine notwendige Vorstellung a priori* という原文の「Vorstellung」を「a priori」の

- 間にコンマをならべ、Der Raum ist eine notwendige Vorstellung, a priori (つまり「空間は、すべての外的直観の根底にある必然的表象であり、それゆえア・プリオリである」と解釈している。スミスもこれに従って、同様の解釈を行なっている。その根拠となっているのは、必然性がア・プリオリであることの徴表であるとする『純粹理性批判』序論での議論である。これらの解釈に従えば、第一の議論における空間の非経験性に引き続いて、第二の議論では空間のアプリオリテートが示されることがより明瞭に理解できるのである。Vgl. H. Vaihinger, Kommentar zu Kants Kritik der reinen Vernunft, Bd. II, S. 171., S. 185., N. K. Smith, A Commentary to Kant's Critique of Pure Reason, p. 103.
- (7) Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 262f.
- (8) Vaihinger, a. a. O., *ibid.*
- (9) Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 185f.
- (10) Vgl. Martin, a. a. O., S. 32f. (前掲訳書、三七頁以下参照)。
- (11) Martin, a. a. O., S. 35. (前掲訳書、四一頁)。
- (12) Martin, a. a. O., S. 39. (前掲訳書、四六頁)。
- (13) Martin, a. a. O., S. 38. (前掲訳書、四五頁)。
- (14) 量義治氏による超越論的観念論の主観性の原理についての批判は、まず第一の議論と第二の議論の究明が破綻していることに依拠している。量氏がこれらの議論を失敗とする根拠は、次の通りである。まず第一の議論に関して、「感覚自体には空間的性格がない」という「感覚の非空間性という思想」は、質料と形式の二元論に基づく「超越論的観念論の根本思想」であり、第一の議論はそれを前提としているが、「この根本思想そのものは無検証であり」「十分な根拠を有するものではない」「ゆえに、この議論は「不成功に終わっている」というものである(量、前掲書、一三一頁以下)。さらに、「実在的に空虚な空間の存在を考えることは不可能である」「ゆえに「空間表象は絶対的必然性を有さない」ので、第二の議論は「完全に失敗していると言わざるをえない」、とする(量、前掲書、一四三頁以下)。これらの批判については、直接的にはマルチンの説によって解決されている。ま

た、カントが空間概念を「証明」(Beweis)しているのではなく、あくまで「究明」しているということに注目するならば、量氏の解釈の妥当性もまた問題となるであろう。

- (15) Vgl. Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 204.
- (16) Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 262f.
- (17) Vaihinger, a. a. O., *ibid.*
- (18) Vaihinger, a. a. O., *ibid.*
- (19) Paton, *ibid.*, I, p. 116.
- (20) Vgl. Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 242ff.
ファイヒンガーは第一版と第二版の議論が「まったく異なった思考過程を含んでいる」ことを注意している。
- (21) 量義治氏はわれわれの解釈とは逆に、空間の単一性、無限性を「根本的論拠」として解釈している(量義治、前掲書、一五四頁以下参照)。
- (22) Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 265ff.
- (23) Vgl. Vaihinger, a. a. O., Bd. II, S. 275ff.

(こんどう しゅう 法政大学)